問題一　次の各群の①～⑦の中には、他と性質の異なるものが一つずつある。それを選び出し、符号で答えよ。

A群　①あをによし　②たらちねの　③くさまくら　④しろたへの　⑤これやこの　⑥あしびきの　⑦あらたまの

B群　①台所　②重箱　③献立　④野宿　⑤番組　⑥図柄　⑦極細

C群　①丑　②寅　③巳　④酉　⑤申　⑥甲　⑦卯

D群　①望月　②長月　③卯月　④睦月　⑤文月　⑥如月　⑦霜月

E群　①とても　②再び　③どうぞ　④なぜ　⑤まるで　⑥全く　⑦とんだ

問題二　次の①～⑤の熟語には各々〔　〕で示した数だけ誤字がある。例にならい、正しい漢字に改めよ。

《例》天意無法〔2〕→解答＝衣・縫

①天主閣〔1〕　②前後策〔1〕　③菜食兼美〔3〕　④責任点火〔2〕

⑤辛抱遠慮〔2〕

問題三　次のA群の慣用句やことわざの中の空欄①～⑤に適する語をB群の中から選び、符号で答えよ。

A群　A　捕らぬ《　①　》の皮算用　B　鳴かぬ《　②　》が身を焦がす

C《　③　》耳を執る。　D　借りてきた《　④　》　E　袋の《　⑤　》

B群　ア馬　イ羊　ウ狸　エ犬　オ豚　カ烏　キ猫

ク鯨　ケ蛍　コ牛　サ鳥　シ鷹　ス象　セ鼠

問題四　次の傍線を施した助動詞の意味を後ろの語群の中から選び、符号で答えよ。

A　雨が降りそうだから帰ろう。　B　幼い頃のことがしきりに思い出されるらしい。

C　彼は今日は来られないだろう。　D　たいへんみごとな紅葉だった。

E　先生が来られた時にお話しします。

【語群】

①可能　②受身　③丁寧　④使役　⑤自発　⑥様態　⑦完了

⑧推量　⑨尊敬　⑩勧誘　⑪比較　⑫比況　⑬卑罵　⑭断定

問題五　次の①～⑤の短歌の評を後ろのA～Gの中から選び、符号で答えよ。

①人も　馬も　道ゆき疲れ死ににけり。旅寝かさなるほどの　かそけさ　（釈迢空）

②牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ　（木下利玄）

③みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ　（島木赤彦）

④垂乳根の母が釣りたる青蚊帳（あをがや）をすがしといねつたるみたれども　（長塚節）

⑤おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く　（伊藤左千夫）

【評】

A　二句切れの歌。客観的で淡々としたよみぶりであるにもかかわらず、自己のいのちをいとおしんでいる哀切な心が響き出ている。

B　枕詞を用いている。素直に実感を語っているところに心に沁みてくるものがある。懐かしい郷里に帰って、解放されたようなゆとりを感じさせる。

C　作者は、無数の民衆の、人生を生き抜いてきた知恵を探ることを仕事にしてきた。そういう背景が感じ取れる作品である。

D　影像の鮮やかさは上の句にあり、叙情の中心は下の句にあり、両者は対比されている。それでいて、不思議と何かしらもの悲しい雰囲気を出すことに成功している。

E　感動に引き締まった上の句に対し、下の句は重く深く余情をたたえた表現である。季節の推移に感動した

時の作である。

F　上の句は眼前の事実に対する写生。それを説明した下の句では、それまで歌語とは考えられなかった漢語を勇敢に用い、しかも成功している。

G　上の句も下の句も主語・述語を備え、それぞれ独立した情景を表現する文をなしていて、しかも二つの情景が響き合いによって統一されるという、連句的構成手法を用いている。

問題六　次の文章を読み、後の問に答えよ。

彼は机上、車上、厠上の楽しみを実に≪　A　≫繰り返した。時には路上においてさえも……。それは≪　B　≫作中人物に転身する楽しみであった。彼は天竺の仏のように無数の過去生を通り抜けた。イヴァン・カラマゾフを、ハムレットを、公爵アンドレエを、ドン・ファンを、メフィストフェレスを、ライネッケ狐を、――しかもそれらの或るものは、一時の転身には限らなかった。≪　C　≫或晩秋の午後、彼は【　ア　】、年とった叔父を訪問した。叔父は長州萩の人だった。彼は≪　D　≫叔父の前に滔滔と維新の大業を論じ、上は村田清風から下は山県有朋に至る長州の人材を讃嘆した。が、この虚偽の感激に充ちた顔色の蒼白い高等学校の生徒は、当時の大導寺信輔よりも≪　E　≫若いジュリアン・ソレル――「赤と黒」の主人公だった。信輔は当然またあらゆるものを本の中に学んだ。少なくとも本に負う所の全然ないものは一つもなかった。実際彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかった。寧ろ行人を眺める為に本の中の人生を知ろうとした。それは或は人生を知るには迂遠の策だったのかも知れなかった。が、街頭の行人は彼には只行人だった。彼は彼等を知る為には、――彼等の愛を、彼等のゾウオを、彼等のキョエイシンを知る為には本を読むより外はなかった。本を、――殊に世紀末の欧羅巴の産んだ小説や戯曲を、彼はその冷たい光の中にやっと彼の前に展開する人間キゲキを発見した。いや、或は善悪を分たぬ彼自身の魂をも発見した。それは人生には限らなかった。彼は本所の町々に自然の美しさを発見した。しかし彼の自然を見る目に≪　F　≫鋭さを加えたのはやはり何冊かの愛読書、――就中元禄の俳諧だった。彼はそれを読んだ為に「都に近き山の形」を、「鬱金畠の秋の風」を、「沖の時雨の真帆片帆」を、「闇のかた行く五位の声」を――本所の町々の教えなかった自然の美しさをも発見した。この「本から現実へ」は常に信輔には真理だった。彼は彼の半生の間に何人かの女に恋愛を感じた。けれども彼等は誰一人女の美しさを教えなかった。≪　G　≫本に学んだ以外の女の美しさを教えなかった。彼は日の光をスかした耳や頬に落ちた睫毛の影をゴオティエやバルザックやトルストイに学んだ。女は今も信輔にはその為に美しさを伝えている。若しそれ等に学ばなかったとすれば、彼は≪　H　≫女の代わりに牝ばかり発見していたかも知れない。……

芥川龍之介「大導寺信輔の半生」

問一　傍線部①はどういうことを意味しているのか。次から選び、符号で答えよ。

ア　将棋　　イ　写真　　ウ　読書　　エ　旅行　　オ　食事

カ　音楽　　キ　議論

問二　傍線部②③④⑤は誰の作品中の人物か。次から選び、符号で答えよ。

a　ゲーテ　　b　シェークスピア　　c　ドストエフスキー　　d　ティルソ・デ・モリーナ

問三　傍線部⑥⑦⑫の読みをひらがなで示し、傍線部⑧⑨⑩⑬のカタカナを漢字に改めよ。

問四　空欄≪A≫～≪H≫に当てはまる語を次から選び、符号で答えよ。

①現に　　②いっぱしの　　③あるいは　　④いわば　　⑤全体的な

⑥少なくとも　　⑦むしろ　　⑧多少の　　⑨ことさらに　　⑩しばしば

問五　空欄【ア】に入るべき語句を次から選び、符号で答えよ。

①自分の賢さを示すために　　②久しぶりに慰めるために　　③小遣いをもらうために

④人生観を聞き出さんがために　　⑤歴史に詳しいところをひけらかすために

問六　傍線部⑪は「なかんずく」と読む語であるが、その意味を次から選び、符号で答えよ。

①多分　　②とりわけ　　③よほど　　④恐らく　　⑤さすがに　　⑥結局

問七　傍線部⑭⑮の作家の代表作を次から選び、符号で答えよ。

①戦争と平和　　②星の王子さま　　③百年の孤独　　④ドン・キホーテ　　⑤白鯨

⑥ジャッカルの日　　⑦ライ麦畑でつかまえて　　⑧怒りの葡萄　　⑨谷間の百合

問八　α「都に近き山の形」、β「鬱金畠の秋の風」、γ「沖の時雨の真帆片帆」、δ「闇のかた行く五位の声」の句の上五（かみご）はどれか。次から選び、符号で答えよ。

①いそがしや　②松茸や　③朝露や　④稲妻や

問九　芥川龍之介がこの文章で最も強調したいのは次の内のどれか。符号で答えよ。

①読書の楽しさ　②信輔とジュリアン・ソレルの仲　③知識を蓄える意味

④読書による現実把握　⑤欧羅巴文学の偉大さ　⑥人格形成に影響を及ぼす読書